村上忠順翁顕彰会報

目　　次

あいさつ
○歌集編纂と村上忠順 …… 1ページ
○村上文庫について …… 5ページ
○松本奎堂遺詠の碑
　除幕式に参列して …… 5ページ
○歴史探訪記 …… 6ページ
○幕末の年表と忠順年譜 …… 8ページ
○表紙のことば・編集後記 …… 8ページ

村上忠順翁顕彰会報
第14号
編集　村上忠順翁顕彰会
　　事　務　局
発行　平成15年3月1日

村上忠順翁顕彰会報十四号発刊によせて

豊田市長　鈴木　公平

厳しい寒さの季節がようやく通り過ぎ、各地から春の便りが届き始めましても、ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

この度、貴顕彰会が発足以来、発行を続けてこられた会報も早くも十四号を迎えられました。この間、忠順翁の顕彰・研究を重ねられて多くの市民の皆様がその立派な業績や人物像に触れる機会を設けていただいております。ひとえに顕彰会各位のご研鑽の賜物と厚く感謝を申し上げる次第であります。

郷土の歴史は単に過去の事柄として伝えられるのではなく、地域に息づく文化や風土として今に生きる私たちに繋がっています。心豊かな地域社会の形成をめざす本市にとりましても、郷土の歴史に学ぶべきところは多大であります。

地域の誇りうる偉大な人物である忠順翁の功績を、次代に継承していただくためにも、今後とも顕彰会に寄せられる期待は大きなものであります。貴顕彰会の益々のご発展と会員の皆様のご健勝を祈念申し上げ、ごあいさつとさせていただきます。

十五周年を迎えて

村上忠順翁顕彰会会長　石川　隆

会員の皆様におかれましては、益々のご健勝のことお慶び申し上げます。

「光陰矢の如し」と申します。御陰を持ちまして十五周年を迎えることが出きました。心よりお礼を申し上げます。

「峠を越れば雪だった」雪景色に囲まれての馬籠・妻籠の歴史探訪は多数の方々の参加によって有意義な研修を終えることが出来ました。今回の歴史探訪は村上忠順翁が活躍した時代とラップする明治維新前後の激動の時代を捉えた島崎藤村の小説「夜明け前」を中心に時代背景を学ぶと共に歴史的に物を見ることを学ぶ研修でもあった。これからの顕彰会事業に新しい領域が一つ加わった様に思います。

終りに事務局の田中さんを始め会員の皆様のご協力とご理解に感謝を申し上げますと共に顕彰活動に一層のご支援をいたゞきますようお願い申し上げます。

歌集編纂と村上忠順

中澤伸弘

近世後期に各地で類題の和歌集が編まれた。これはその歌人（編者）が見聞きしたものや歌を募集したもの、先行歌集から抜き集めたもの等々その編纂経過の相違、また特定の地域的、門人先師と言つた同門歌壇の人々、全国の歌人などとその内容においても特色のうかがへるものである。

村上忠順も自らいくつかの歌集を編んだのであり、その功は大いなるものがあつた。忠順編の『類題玉藻集』初編巻末の「蓬蘆村上先生著書目録」には二十二種類の著書が記されてゐるが、その中に歌集の編著については、

類題玉藻集
初編既刻　二編追刻

とのみあるが、明治初年に刊行された『類題嵯峨野集』巻末の「蓬蘆村上翁著書目録」には、七種十六冊の編著の和歌集の名が見える。いま、その部分を次に記してみる。

類題玉藻謌集
巾箱本全三冊　已刻
此集は当時現存の哥どもを撰べるなり　小澤芦庵　橘千蔭などの哥どもえらび入られたるは六帖詠草朮が花などに入らえざるを探索して加へ入られたり　巻末に六百余人の姓名を記せり

類題玉藻集二編　全三冊刻成
此集も前編につぎて珍しき哥多し　小澤、橘の外に本居翁の哥も入たり　是又其鈴舎集にはもれたる哥どもなり　巻末に鰒玉鴨河稲葉集等に入たる類哥のさだあり　是も六百余人の姓名を附す

類題菅藻集　全三冊刻成
是も前編の三篇がねに諸国よりおくり来れるを類題せられたるなり

嵯峨野歌集　全二冊刻成
花洛西嵯峨埜にて当所の人々の哥を聞書せられたる類題集なり

千代乃古道集　全二冊
大君の御楯として嵯峨に再あられける頃の撰にして嵯峨野集の二篇とせられたり

詠史河藻歌集　全二冊已刻
此集は尊き神々より初て天子后妃文臣武臣孝子義勇貞婦遊女に至るまで　歴史軍記に載たる人々を詠じたる哥をあつめたる書なり　詠史哥集に載たる哥は一首も採られず現存の人々の秀哥多し

元治元年千首　全一冊已刻
紀の国にて九百首までいで来たるに撰者黄泉の客となられければ其千首大成せざるを惜みて此撰はありしなり　現存の人一人一首にて千人の秀逸を類題せられたるなり

『類題玉藻集』初編は安政六年十月の忠順の序文があり、この頃には完成してゐたのであらう。（刊年は熊谷武至氏によると初編二編ともに文久の頃と言ふ。）また『類題嵯峨野集』は明治二年頃と言ふので、安政六年から明治初年にかけての約十年間は、忠順にとつて、このやうな歌集編纂の意志が盛んだつた事が言へよう。ここには記されてゐないものの『類題三河歌集』の編纂に助力したり、村上一族をはじめとする歌集『六華集』も編んでゐるのである。尤も歌集のみならずその他の標註本なども作つてゐるので、最も安定、且つ充実した年頃であつたのだらう。

丁度この期間に當る文久元年、忠順は數へ五十歳の年を迎へた。この五十賀に當り「読書延齢」の題で近隣各地から歌が寄せられ、それが『類題玉藻集』二編に収められてゐる。全てで六十四人六十四首で、その内訳は地元三河が二十六人（うち親族、村上氏深見氏など九人）、尾張十六人、出雲十四人、紀州二人、他六人である。紀州の二人は忠順の師熊代繁里と、またその師山内繁樹の子繁憲である。

千年へて君こそみらめうつせみの世にありとある書のかぎりは　繁憲

心ゆく昔の道をふみみつつ神のよはひに君ぞあえなむ　繁里

殊に注目すべきは森爲恭ほか十四名の出雲歌人の出詠である。

皇神の道の八千書やまとふみよむ人いかで千代経ざらめや　爲恭

忠順と出雲との関係は深いものがあつたのであらう、『類題玉藻集』二

編の序文には出雲大社の千家尊澄が序文を寄せてゐるし、後述する『千代の古道』についても言へる。

この何れもが読書が齢を延ふることを歌にしてゐるが、この読書延齢といふ題が忠順の思ひをよく表はしてゐよう。

また同書には「村上忠順が新室賀に栽松といふ事を」と題する歌群がある。全てで六十六人六十六首で、これは先の「読書延齢」の出詠者とほぼ同じで、この事から五十賀と新室賀の祝歌が同じ時に詠まれた事と思はれる。五十歳で新居を建てたのは、書斎の整備とともに学問の安定と成熟が思はれる。『六華集』には書斎千巻舎完成の祝ひの歌があるが、この事はまた別の折に記す事とする。

再び先に記した「蓬廬村上翁著書目録」を見てゆくと、新たな発見がある。『類題玉藻集』の編纂に当つては、廬庵や千蔭、宣長の歌などは、その既に刊行されてゐる歌集以外から珍しい歌を採つたと記してゐる。『詠史河藻集』についても、長澤伴雄の『詠史歌集』と重なるものは一首もないと記してゐる。斯様に忠順には新たな歌を載せると言つた編纂の意図があり、そこに独自の歌集の特色を出さうとしたのであつた。世に知られてゐない歌を紹介するといふことは、それなりの資料や元歌稿を所持してゐなければならないことであり、ここに蔵書家としてそれらのものを所有してゐた忠順の面目の躍如たるものがあらう。ただそれゆゑに忠順は自らの編纂に対する危惧もあつた。それが「巻末に鰒玉、鴨川、稲葉集等に入たる類哥のさだあり」と記す所である。これは、架蔵本では巻末ではなく、上巻の序文の次に記してある。「いささかおもひよれる事」として忠順の記すところは、近ごろ出来た稲葉集に千載集所収の歌と同じものがあり、鰒玉集にも頓阿の歌と同じものがある。これらのものは暗に合つたもので、作者も撰者もわからなかつたことで、同様の事は鴨川集にもある。奥儀抄の例にならふとこれは盗歌と言ふものであるが、これらは偶然の事であつて「かくて思へばこの集にもさるたぐひこゝらあるべし」と言ふものである。即ち忠順は新たな歌を採る一方で、古人の作と似たものがある事をも弁護してゐるのである。忠順の歌集を編む態度が明らかである。『稲葉集』は中島宜門の編になり、鳥取地方(因幡)を中心とする歌人の詠を集めたもの。『鰒玉集』は紀州の加納諸平の編になり、当時の全国歌壇に強い影響を与へ、七編まで続いた。『鴨川集』は諸平の盟友長澤伴雄が『鰒玉集』に倣つて編んだもので五編まで続いた。斯様な中央歌壇の類題集に対する忠順の立場も明確である。

先に挙げた書目にあつた『類題菅藻集』は遂に刊行されなかつた様である。「已刻」とあるが不審である。また『元治元年千首』は紀州の西田惟恒の編になる『安政年々歌集』の後の万延、文久に継ぐものである。惟恒の急逝によつて頓挫した編輯を、忠順が行なつたのであり、惟恒と忠順の関係、言はば紀州と三河の忠順との関係が思はれる。忠順のいくつかの書が紀州の書肆阪本屋喜一郎(同大三郎、同源兵エ)から出板されてゐることや、師の熊代繁里も紀州人であつた事とも関係しよう。

『類題嵯峨野集』の成立については、拜郷蓮茵の序文や自序に明らかである。それによると慶応二年の秋から翌年の春まで、大君のみ楯として上京し、嵯峨野に住んだと言ふ。(忠順にこの折の『嵯峨日記』あり)その時に嵯峨をはじめ京の人々の歌をまとめたものがこの集であると言ふ。巻頭に小澤蘆庵の歌を据ゑ、ついで吉塚景命、池戸俊夏、丸孝文、浅野夏道と続くが、これらの人々は嵯峨にゆかりある人なのであらうか、歌人としては著名でない人物である。

最後に『千代の古道集』について記さう。この本は遂に刊行されず、稿本として村上家に残り、昭和四十三年五月に築瀬一雄先生によつて碧冲洞叢書八十一輯として孔版印刷で世に出た。そのはしがきに本書刊行の経緯が記されてゐるので引用する。

忠順の「年中日次記」に徴すると、明治三年十月廿八日から閏十月八日にかけて、五日間をつひやして校正を行つてゐることが判る。ここに云ふ校正は、稿本の校正であつて、印刷の校正ではない。又、明治四年五月廿二、廿三の両日にも、「千代古道上校合」「同書下校合」のことが見える。(中略)忠順はこの校正、校合を自宅ではなく、女婿にあたる深見篤慶の新堀宅で行つてゐる。恐らく忠順の他の著作と同じやうに、篤慶の資によつて出版しようとしたものと思はれるが、その事は実現せずに終つた。

先の書目には大君の御楯として再

び上京した折のものと言ひ、嵯峨野集の二編とし、簗瀬氏もその解題に「『千代古道集』と云ふ書名は、洛北の歌枕によるものである」と記す如く、これまた洛北ゆかりの歌集であると言ふも、忠順の再びの上洛はいつの事であつたのか。この集はほぼ全国的な当時の歌人の歌を網羅し、故人も注目すべき人は採つてゐて、忠順の目配りがうかがへる。本書編輯は『嵯峨野集』と違つて全國に歌を募つた事が言へる。それを徴するものに、刈谷の村上文庫に『出雲詠草』『飛驒詠草』が残り、この二冊が「嵯峨野集二編」のために出詠した旨が記され、『出雲詠草』には千家尊澄、尊福、細野篤左衛門、細野安恭、内藤高行、細野安幸の自筆詠草稿が、『飛驒詠草』には飛驒歌人の宮田禮彦、桐山孝雄、小合川夏丸、田島定孝の詠草があり、ついで『出雲詠草』に綴るべきを誤つたか「鶴山社中歌」として千家尊孫、尊算尊賀の自筆詠草稿を綴つてゐる。鶴山社中は尊孫の率ゐた歌壇である。これらの人々が、この『千代古道集』に何首採られてゐるかを見ると、千家尊孫三十八首、尊澄十三首、尊福三十首、尊賀十三首、尊算六首、森為安十三首、細野安恭四首、富田禮彦四十七首、小合川夏丸二十二首、田島定孝七首などとなる。そのうち先にあげた『詠草』との関係を『出雲詠草』について見よう。

巻頭の尊孫の立春の歌

浪風のこゑ治まりてうらゝかに
立は霞と春と也けり

は尊孫の詠草にある。他に尊孫の「都」と題する歌も詠草にある。尊孫の子尊澄についても「大政復古」の歌が採られてゐるし、尊福は「鄙」、尊算は「朝蛙」「春眺望」の歌が詠草から取られてゐる。詳しく検討する時間がないが、ここから忠順はこれらの詠草の中から歌を採つた事がわかる。殊に尊福の「鄙」の歌は、草稿には「いふ事のなべておろかにみゆるまで～」とあるのを「いふ事の」に朱で「こととひの」と訂正し、それを採用してゐる。尊福は当時二十歳程の年齢であり、忠順は誤ちや坐りの悪い歌には訂正を加へた事がわかるのである。

なほ師、熊代繁里の歌は四十一首ある。

この様に幕末から明治初年までは盛んに編輯刊行された類題の和歌集は、時代の推移によつて編まれなくなつていつた。忠順も『類題嵯峨野集』以降はその出板を断念した事、先に述べた通りである。唯一晩年の明治十四年に師、熊代繁里の歌集を編輯刊行した事が擧げられよう。明治維新以降の忠順は専ら歌を他に投ずることとなる。忠順の思ひを、それらの歌から見てゆくこととする。

明治十一年、明治天皇は信州、北陸を通つて西下の行幸に発たれた。後に明治の五大巡幸と言はれるものの一つで、『明治天皇紀』によると八月三十日に東京出発、群馬、長野、新潟を経て北陸道から京に向はれた。この折に各地より献上された詩歌をまとめたものが、高崎正風編になる『千草の花』であつた。忠順の住む三河には還幸の十月二十八日に通られた。知立の矢野安之助宅にて昼食、岡崎専福寺を行在所とされた。忠順、忠浄父子をはじめ、柴田顕光、羽田野敬雄、富田良穂、中山繁樹、鈴木重光、大島為足、竹尾正久、竹尾茂、三輪経年などの尾三地方の歌人の名が見える。忠順は特に長歌をも詠み、また行幸の感激を書き記してゐる。

村上忠浄

大君の行幸あふげばやす御よに安くすむみのさちをしぞ思ふ
大御幸をろがむけふは草深き鄙も都のこゝちこそすれ

村上忠順

民のわざみし玉はんとここのへの都いでたたすけふのかしこさ
大君のみゆき待えてこのゆふべうらわの里は賑ひぬらむ
賤の女もあふぎまつらむ熊谷のくまなく照す君のひかりを
わせおくてほにいでてこそうたふらめ君の行幸をまつゐだの里
うへ田人うへなき君の大みためつかへまつるや嬉しかるらん
大君の恵の水のふかければ新かた川のかはるよはなし
御車のとまる新発田しば〳〵もかかるみゆきに逢ふよしも哉
たてまつる魚つのいほのあざらけみ君もめでてやきこしめすらむ
よもすがら吹やつるがの浦風も我大君のみいめさますなし
人ごころなごやあがたの広小路ひろき恵を仰がざらめや
つゆ霜のあきさりくればなかざりしむしもねになき　さかざりし千草はなさき　なくむしのこゑなつかしく
さく花のいろめづらしく　おもしろきとき来にけりと　やすみしし我大君は　神ながら神さびせすと　ふとしかすみやこをおきて　しなさかるこしにいでまし　新かたをあさかはわたり　いは橋の淡海をすぎ　せたの橋夕日にわたり　ひむがしのうみつ路へて　鳥が啼あづまのみやこ
おほみやにかへりまさむを　神お

もひおもほしめして　神はかりはかりましつつ　しながとりゐなかにしては　あきの田のわさ穂のかつら小山田のおくてのおしね　いろづくをみそなはしまし　あしびきの山路にしては　谷川のつま木のをふね　そまがたにおのとる木こり　いそしばをみそなはしまし　いさなとりうみつ路にては　あびきするあこをとゝのへ　塩やくともしほくみたれ　いたづくをみそなはしまし　くにといふ國のやそくに　やまといふ山のをちこち　いひしらぬ浦のことごと名ぐはしき島のさきざき　水鳥のあを人草の　なすわざをしろしめさむと　しづたまきいやしきあまの　下情きこしめさむと　雪ふかきくにのはてまで　浪あらきうみのきしまで　はろばろにおほみくるまを　たふとくもめぐらしませり　かくばかりとほくいでます　大君のおほ御こゝろを　あまつ水あふぎまつれば　いはんすべせむすべしらに　かしこくもあるか

明らけく治まる御世にうまれあひて
行幸をろがむけふの畏さ
まなびやにつどふうなゐら家忘れ身
もたなしらず君にまつろふ

忠順の十首の歌は、今回の行幸の地名を詠み込んだもので、いま傍線を付しておいた。浦和、熊谷は埼玉の地名、群馬の松井田は碓氷峠の手前。長野の上田を経て新潟に入り、日本海に沿つて新発田、魚津、南下して敦賀から京に向かはれ、名古屋は帰途に寄られた。長歌は本当に長く、忠順の行幸に寄せる思ひがよくわかるものである。このあとその感激が文として綴られてゐるので、これも紹介しよう。

野するやまのおくにすむいやしき身は、人とうまれしかひもなく、おなじよの人にをれかがみ、つかふるならはしなりしに、大君のみみづからしろしめす御代となりては、あまねきみめぐみの露、かかるたみ草までうるほひて、おのがじしおもふこころのままに、よのなりはひをいとなむ、たのしさはいにしへの聖の御世にもたぐひあるまじく、しかのみならず、いはほそはたつ山路、よるなみあらき浦つたひもいとはせられず、御巡幸あらせらるるを、かしこみたてまつりて

忠順の筆は明治維新時、東幸の供奉に駿府に召された十年昔の感激と重なるものがあつたのであらう。忠順の勤皇の心は変はりなかつたのである。

また本書には深見藤十、その妻愛子及びその長男行太郎、三男永三郎の歌がある。

例しなき鄙の行幸と八束穂もけふを待えて打なびくなり

この歌は永三郎のものであるが、その名の下に「十年三ヶ月岡嵜連雀学校生徒」とある。深見藤十篤慶の妻は忠順の女愛子（登之子）である。即ちこの行太郎、永三郎は忠順の外孫に当るのである。（愛子は年之子とも記した）

この天皇の行幸といふのも明治の新しい形のものであつたが、和歌においては、同明治十一年に文明開化を主題とした『開化新題歌集』が大久保忠保によつて編まれてゐる。その二編（明治十三年刊）に忠順忠浄父子は二首づつ歌を寄せてゐる。三河の地にも開化の波は押し寄せてゐたのであらう。

石炭　忠順

見るがうちにはるけく成ぬ大舟
にたく石すみのすみやかにして

停車場　忠順

いと広き庭につどひてくる煙め
ぐりくるまをまつの下陰

租税　忠浄

家のなりはげみつとめて人ごと
にみつぎいそしむ世こそ安けれ

明治十七年の十一月に逝いた忠順であるが、生前の歌との関りはどこまであつたであらうか。先に先師の『櫻蔭集』を上梓したのが十四年、その序文は橘東世子が記してゐる。橘守部の後を嗣いだ冬照の妻であつたが、東世子は『明治歌集』を五編まで編んだ。東世子の歿後は道守が後をつぎ、その六編を明治十七年九月に出板してゐる。ここに忠順はじめ忠浄、また忠順の女深見年野子（愛子、年之子）と、その二男篤恭（恭次郎）が出詠してゐる。それのみならず本書に忠順は序文を寄せ、東世子亡き後の道守の志をたたへつつ、「おのれはいたく老おとろへて七編をだに見る事かたけれど、けふ此巻のいできたるにつき」一言記したと書いてゐる。年紀は十七年九月とある。『明治歌集』の六編は九月三十日出板とあるが忠順は草稿を見て序文を記したのであらうから、世に広く出たのは十月を過ぎてからの事であらう。忠順は本書の刷り上りを手にしたであらうか。

竹　忠順

かげみればわがよも高く成にけ
りうゑて久しき庭の呉竹

六編に載せる一首であるが忠順の老いを実感させる歌である。忠順が序文を乞はれた事は、当時の忠順の全国歌壇での位置をよく示してゐる

事となる。七十三歳であつた。

『明治歌集』の七編は明治二十年に上梓されたので、自ら記した通り七編を忠順は見る事が叶はなかつた。『明治歌集』の第六編は忠順にとつて最後の歌集であつたと言へるのであり、この後我が国の歌壇は近代短歌の時代へ推移してゆくのであつた。

村上文庫について

〈文庫と利用状況〉

刈谷市中央図書館
館長　市川　裕英

村上文庫は土井氏時代（一七四七～一八七一）の刈谷藩医、村上忠順を中心とした村上家において購入あるいは筆写され所蔵されてきたものであるが、大正三年に、刈谷町の宍戸俊治、藤井清七の両氏が譲り受け書庫、閲覧室と共に当時の刈谷町へ寄贈された。本文庫を中心とした刈谷町立刈谷図書館が、大正六年に開館し、昭和二十五年の市制施行により刈谷市立刈谷図書館と改称、平成二年五月三日には、市制四十周年事業として刈谷市中央図書館を建設・開館し、郷土・参考資料室内に村上文庫室を設け現在に至っている。

系統的に収書され、江戸時代の出版の概要がつかめ、国文学・歴史・地理等に貴重な書籍が多く、蔵書印は所蔵の経過を知るうえに有益等の特色ある資料を末長く保管・維持するために、資料のマイクロ化を図り十四年度完了した。また村上文庫は、昭和三十三年八月一日に刈谷市指定文化財として指定されております。

個人・行政・出版界等々さまざまな分野で調査研究のため、多くの方々に利用があり改めて村上忠順先生の偉業が偲ばれます。

文庫の利用状況

平成十二年度

盛岡大学・御津町教育委員会・早稲田大学・北海道大学・株、浜島書店（名古屋市）・中央大学・神戸新聞総合出版センター・中央大学・株、浜島書店・柳川市役所（福岡県）・東京女子大学図書館・早稲田大学大学院文学研究科・株、山川出版社・九州大学・個人（鳥羽市）・個人（三重県）・個人（刈谷市）・個人（東京）・個人（蒲郡市）・個人（横浜市）・個人（豊田市）・個人（名古屋市）・個人（三重県）・個人（四日市市）・個人（刈谷市）・個人（岡崎市）・個人（三好町）・個人（岡崎市）・個人（刈谷市）・個人（豊橋市）・個人（三重県）・株、コックスプロジェクト（名古屋市）・個人（半田市）・個人（岡崎市）・個人（姫路市）・個人（豊田市）・個人（埼玉県）・個人（名古屋市）・個人（刈谷市）・個人（徳島県）・個人（春日井市）・個人（三好町）・個人（東京）・個人（東京）・村上忠順翁顕彰会・個人（安城市）・個人（刈谷市）・個人（安城市）・個人（東海市）・個人（京都市）・個人（安城市）・個人（福岡市）・個人（岡崎市）

平成十三年度

個人（刈谷市）・個人（名古屋市）・個人（西尾市）・個人（米沢市）・個人（埼玉県）・個人（東京外国人）・米沢女子短期大学（山形県）・株、国書刊行会（東京）・株、浜島書店（名古屋市）・千葉県野田市役所・東京女子大学図書館・安田女子大学図書館（広島市）・個人（名古屋市）・個人（刈谷市）・個人（刈谷市）・個人（名古屋市）・個人（刈谷市）・個人（刈谷市）・個人（刈谷市）・個人（大阪吹田市）・個人（大阪堺市）・株、三弥井書店（東京）・大妻女子大学園教授（相模原市）・千葉県野田市役所・個人（池田市）・都留文科大学付属図書館（山梨県）・株、東京堂出版・個人（亀山市）・姫路工業大学付属図書館・株、浜島書店（名古屋市）・株、三省堂（東京）・米沢女子短期大学（山形県）・御津町教育委員会・個人（狛江市）・個人（福岡市）・八束小学校（島根県）・中央大学文学部・金谷町お茶の郷博物館（静岡県榛原郡）・株、講談社（東京）・名古屋大学大学院・個人（刈谷市）・個人（刈谷市）・個人（東京）

平成十四年度

個人（刈谷市）・個人（川崎市）・個人（一宮市）・個人（東京）・個人（刈谷市）・千葉県野田市役所・日本テレビ放送網、株（東京）・谷汲中学校（岐阜県）・豊明市教育委員会・広島大学大学院文学研究科・一宮町教育委員会・日本放送協会大阪放送局・個人（横浜市）・個人（町田市）・大阪市立大学学術情報総合センター・個人（名古屋市）・たばこと塩の博物館・個人（川崎市）・個人（神奈川県）

松本奎堂遺詠の碑除幕式に参列して

村上　斎

昨年七月二日、奈良県東吉野村伊豆尾笠松みよし山山頂の天誅組総裁松本奎堂（村上忠明の師）戦死の地に、天誅組顕彰会による、奎堂遺詠

の碑建立除幕式に参列のため、（財）刈谷頌和会（旧刈谷士族会）の役員十三名で、午前六時二十分刈谷を乗用車三台で出発した。

天候も薄曇りであったが、針インター附近より快晴となり、猛烈な暑さの中、予定通り伊豆尾中復の一軒家に到着した。心臓やぶりの急な上りを徒歩と考えたら、ぞっとしてきたが、下山して来る車を見て、安らぎを覚えた。以前に訪ねた折は、砂利道であったが、完全舗装してあった。車で登山が出来ることが、うれしかった。山頂駐車場も数台とのことで、地元の車でピストン輸送してもらい山頂へ向った。時に十時であった。式典まで一時間あり、先に到着していた藤井寺市の草村氏と、展覧会、天誅組今昔等々に話しが弾んだ。

定刻の十一時仏式により式典が始まった。参列者は、村長、村の関係者、研究者、刈谷文化協会、頌和会、顕彰会員であった。黙禱に続き除幕、お浄め、献花と進み、式辞、祝辞、献灯（百八万灯明）し、全員で乾杯して、滞りなく終了した。

奎堂遺詠は

君がため　みまかりにきと　世の人に　語りつぎてよ　峰の松風　奎堂

立派な句碑に感無量であった。句碑をバックに記念撮影をし、末永い思い出をつくることが出来た。山頂と言えども、猛烈な暑さに負けた。祝賀会場の杉ノ瀬では、天誅組顕彰会の報告等、特に、奎堂の話しで終始盛り上った。寅太郎墓、湯の谷墓地を参拝し、午後六時半無事に刈谷へ戻ることが出来た。

碑は、四国庵治石で、高さ百八十×幅百三十×厚さ十五センチである。

（左 村上・右 草村氏）

歴史探訪記

〈夜明け前に学ぶ忠順の時代〉

十一月五日、暮秋の木曽路はあいにくの霜寒の日となった。昨夜降ったという雪で恵那の山並みは白く灰色の雲がかかっていた。

今回の歴史探訪は回を重ね十四回を迎へた。参加者は、四十八名でバスの中は補助席を使用するほどであった。

過去十三回の歴史探訪を踏へた今回の探訪の目的は、幕末期を生きた忠順の生涯とその時代背景に目をとめ特に維新を支えた国学者たちの動きと忠順の生涯を重ねるとき島崎藤村の「夜明け前」が浮んでくる。この小説から歴史を学び忠順とその時代を顕彰しようとするものであった。

藤村の「夜明け前」について、つぎの小論（篠田一士）がある。

夜明け前は、嘉永六年（一八五三）から明治十九年（一八八六）あたりまでの約三十年間におよぶ日本の歴史が物語られているのである。物語るというのは正確ではない。むしろ記述という方が内容にふさわしい。

小説的なコンテクスト（文脈）のなかでえがかれているのではなく、あたかも歴史書のように、それは無表情だ。もちろん「夜明け前」は歴史書とちがうから、その場合にも歴史上の人物が登場して小説的な所作をするにはするがずいぶんと控え目である。いってみれば「夜明け前」には半蔵を核とする情熱的なロマネスク（小説的）の部分と、それを冷やかに見下すような姿勢をとる厖大な文字でつづられた歴史的記述の部分とが並列していてこの両者の関り合いがどうも一般の小説とはちがう印象を読者に与えてしまうのだ。小説的感興を満喫できなかった読者は結局最後にはこれは小説ではなくて歴史だとほざいて、敬って遠ざける結果となるのである。

（注、忠順一八一二～一八八四）

今回の歴史探訪にあたり、その目的を主に次の三つにしぼり「研修のしおり」を作成した。その一は、幕末期を小説の中から学び忠順の生涯に重ねてみること。その二は、中山道の歴史と時代背景を学ぶこと。その三は、維新を支えた国学者の動きを学ぶこと。

午前十時、予定どおり目的地の馬籠宿藤村記念館に着き副館長牧野式子さんの出迎へを受けた。準備された木造の広い講堂の窓からは遙か恵

完

（恵那の山並み）

（講演会）

那山へつづく山並みが間近にせまっていた。木曽路はすべて山の中…の一節を実感した。

ここでお願いしておいた副館長牧野さんの講演を聞いた。

木曽路は、深い森林地帯をいくつもの嶮岨な山坂を越える一筋の街道であった。木曽は十一宿、二十二里余りにわたる深い谷に宿は散在していた。諸大名の行列が往来し、文久元年（一八六一）には、公武合体の大儀のもと皇女和宮が通過された。又、水戸を出た浪士の一隊が木曽福島の関所をさけて岡谷から伊那街道をとり飯田から清内路の峠を越え再び木曽路の馬籠に入り中津川へ向ったのは元治元年（一八六四）のことであった。このとき木曽谷と伊那谷の平田派国学者の働きを見逃すことはできない。この頃寺田屋事件（一八六二）天誅組の挙兵（一八六三）等々激動の幕末期であった。このとき忠順は、五三歳であった。

講演は藤村の話題から木曽路・馬籠宿の歴史などに及び有意義な時を過させて頂いた。又我々のために資料を準備して頂いたことに感謝する。

講演の後藤村記念館を見学し、馬籠茶屋という店で昼食をとった。

馬籠宿をあとに初雪の残る馬籠峠を越えた。ほどなくして山に囲まれた谷に妻籠宿が見えて来た。ここは今日最後の見学地である。自由時間をとりそれぞれ散策を楽しみバスは帰路についた。

今回の歴史探訪は視点をかえての研修であった。多くの会員のご参加を得て、また一つ顕彰の実績を重ねることが出来ました、感謝します。

事務局記

（馬籠宿道標）

探訪追記

島崎藤村（本名・島崎春樹）

明治五年（一八七二）中山道馬籠宿に生れる。明治一四年上京し小学校を経て明治学院に学ぶ。明治三〇年第一詩集「若菜集」を刊行し、文学的第一歩を踏み出す。明治三二年函館出身の秦冬子と結婚。「千曲川のうた」「椰子の実」などは今も歌いつがれている。詩人として出発した藤村は後に小説家に転身した。昭和四年より一〇年まで「中央公論」に父をモデルとして明治維新前後を描いた長編小説「夜明け前」を連載。歴史小説として高い評価を受ける。

昭和一八年（一九四三）大磯町の自宅で歿す。七一歳

中山道（なかせんどう）

徳川家康が天下をとってまず着手したのが道の整備であった。江戸を起点とする東海道・中山道・甲州街道・日光街道・奥州街道の五街道を幕府の手によって設けた。中山道は当初「中仙道」という表記もされていたが享保一年（一七一六）幕府によって「中山道」に統一された。

また、木曽を通るので「木曽路」とも呼ばれていた。中山道は、東海道の川留めを避けて利用する人も多く、参勤交代の大名、東下する皇族などにも盛んに利用され六九ヶ所の宿場が置かれていた。その内の一一宿が木曽にある。中山道は江戸から京まで一三五里三四町余り（約五四〇キロメートル）。東海道より約四〇キロメートル長い。

川越えと関所

江戸時代大きな川には橋が架けられておらず一旦大雨が降ると川留めとなり旅を続けることができなかった。東海道では六郷川、富士川、阿部川、大井川、天竜川などには橋がなく船や蓮台、人足で渡った。豊川、矢矧川、瀬田川などには橋が架けられていた。幕府は街道の要所に関所を置いて「入鉄砲に出女」と言われるように江戸に入ってくる武器や江戸にいる大名の妻子の帰国を監視していた。全国には五〇ヶ所以上の関所があった。東海道の箱根、中山道の福島、碓氷などは特に重要な関所であった。

馬籠宿（まごめじゅく）

木曽一一宿の最南端、美濃との国境にあり、江戸板橋から数えて四三番目の宿場である。中山道が急な山の尾根を通っていることから全国でも珍しい「坂に開けた宿場」となっている。過去しばしば大火に見舞われた。「夜明け前」の舞台でもある。

幕末の年表と忠順年譜（略）

幕末…江戸幕府の末期一八五三（嘉永六）普通ペリー来航以降をいう
忠順…一八一二（文化九）生る。一八八四（明治一七）歿す。

嘉永　六（一八五三）
アメリカペリー軍艦四隻浦賀に来港・ロシアプーチャーチン軍艦四隻長崎に来航
忠順、父忠幹歿す・忠順土井候（刈谷藩）の侍医となる（四一歳）
安政　一（一八五四）
イギリススターリング軍艦四隻長崎に来航
このころから欧米諸国の東亜進出急を告げる。我が国は開港の道を歩むこととなる
〃　二（一八五五）
フランス軍艦長崎に入港
忠順、藩主に同行し江戸へ行く（四四歳）
〃　四（一八五七）
忠順、長女年之新堀村深見藤十（篤慶）かたへ養女に出す
安政　五（一八五八）
安政の大獄（井伊直弼により行われた尊攘派一掃の弾圧）
万延　一（一八六〇）
桜田門外の変（尊攘派志士による大老井伊直弼の暗殺事件）
文久　二（一八六二）
一四代将軍家茂和宮と結婚し公武合体成る・伏見寺田屋事件
〃　三（一八六三）
天誅組挙兵（大和義挙・天誅組事件・幕末における倒幕挙兵の先駆）
慶応　二（一八六六）
十四代将軍徳川家茂歿す。徳川慶喜十五代将軍となる
孝明天皇歿す（三六歳）急死は毒殺といううわさたつ
〃　三（一八六七）
大政奉還（将軍慶喜により幕府の政権を朝廷に返上）
明治　一（一八六八）
江戸開城・明治と改元し一世一元制を制定
忠順、三月に有栖川宮熾仁親王に召され駿府に出仕し宮に同行し江戸西ノ丸へ入城する
忠順、有栖川宮の命を受け伊勢、熱田両神宮へ戦勝祈願文を起草
忠順、十一月有栖川宮西下に際し岡崎に出迎え奉従し京に上る
〃　二（一八六九）
戊辰戦争終結する
〃　四（一八七一）
社寺の所領奉還・碧海、幡豆郡農民と一向宗徒一揆起る・廃藩置県行われる・宗門人別帳廃止・全国を三府七二県とする
〃　五（一八七二）
忠順、忠浄と共に捕えられて京に送られる（忠順六一歳）
人口調査実施される・戸籍簿編成される・庄屋、名主、年寄を廃止し戸長設置・太陽暦を採用する
徴兵令頒布される・学制頒布
〃　六（一八七三）
全国キリスト教禁制の高札撤廃
郵便制を布き飛脚業を禁じる
忠順、熊代繁里忠順宅を訪門する
〃　七（一八七四）
神戸から大阪間の鉄道仮開通
忠順、古事記標註刊行
〃　八（一八七五）
忠順、山室山神社の神還行事に参列し神宝の鏡を奉持する、祭神は秋津彦美豆桜根大人（宣長）神霊能真柱大人（篤胤）
忠順、京都神光院に大田垣蓮月を訪ねる。十二月蓮月は病気のため神光院茶所にて歿す（八四歳）
〃　一三（一八八〇）
忠順、有栖川宮熾仁親王に召されお酒を賜る
〃　一四（一八八一）
真宗西本願寺派を本願寺派、東本願寺派を大谷派と改まる
〃　一七（一八八四）
忠順歿す（十一月二三日七三歳）
〃　一九（一八八六）
有栖川宮熾仁親王歿す（七四歳）

表紙のことば

村上邸の南は大木のある小高い小さな台地で神社の杜につづく。ここに忠順翁の墓と「千巻舎碑詞」がある、碑の題額には「蓬廼廬熾仁」と刻まれている。碑の前に枝垂梅の古木があった、早春には芳香が満ちていたであろうが枯れてしまった。心を痛めた顕彰会は会員の皆さんに寄付を募り紅白二本の枝垂梅の幼苗を植えたのは一昨年のことであった。幼木はもみじに覆われてやっと今年になって五六輪の花をつけた。

（写真は同種の別木）

熊代繁里ぬしの
一周忌に寄花懐旧　忠順
君しのぶをりしもにほふ梅の花
ことしはあだにみてや過ぎなむ

編集後記

無心に編集を終え、ふとさみしさを覚えた。簗瀬先生の稿がないことに気付いた。今号に投稿賜った中澤先生は、忠順に関心をもたれ顕彰会との出合いは五年前の平成十年であったこのご縁を大切にし、益々のご活躍を祈念し感謝したい。事務局記